

ささがに 掌編（雪迎え他
九本）

sasagani

邪指 (evil nail)

夏休みの課題のため、町外れにある古民家を訪ねたのがそもそもの始まりだった。

濡れ縁に腰をかけ、古民家の管理をしている老人に町の歴史を聞いていると、ちくりと左の人差し指に痛みが走った。

見てみると、爪の間に黒いトゲが入り込んでいた。木材がささくれ立っていたのだろう。

老人がトゲ抜きを持ってきてくれたが、深く食い込んでいて取れそうもなかった。痛みはしばらくすると収まったので、自然に取れるまで放っておくことにした。

その日の深夜、トゲの刺さった指が灼けるように痛み、たまらず目を覚ました。

救急箱から爪切りを出し、爪の形が楕円になるくらい深く切ってみたが、トゲは取り出せなかった。昼と違い、痛みも一向に収まらなかったなので、仕方なく氷嚢で冷やした。

ふと、外がやけに騒々しいことに気がついた。窓を開けると、ウーカンカンという音とともに、くるくる回るランプが見えた。

消防車が向かう先に、煙がもうもうと上がっている。そこがあの古民家だと思い至った瞬間、指の灼熱感がより激しくなった。

氷嚢を離すと、爪が見知った何かに見えた。

——人の眼だった。

冷えて血の気が失せた楕円形の爪先が白目で、その中心を縦に裂くトゲが黒目だ。

おもむろに「黒目」が赤く染まったかと思うと、私の視界も同じ色に塗り潰された。

その夜の事は夢か幻覚だと思いたかったが、現実には古民家は焼けていた。

今年の夏は異常なほど火事が多く、住宅ばかり全焼し、死人も出たという。

火事に遭ったのは、昔古民家に住んでいた者の血縁者の家ばかりだという噂を耳にした。

黒いトゲは、まだ爪に食い込んだままだ。

なぜ、私なのだろう。

火事の度に爪が熱く痛み、黒が赤に転じる。

赤い夜は、あといくつ訪れるのだろうか。

「悪い。こないだ借りた傘、なくしちゃった」

平謝りをしながらAが差し出してきたのは新品のナイロン傘だった。拾ったビニ傘が上等に化けた理由を尋ねると、Aは少し考え込んだのち、口を開いた。

「あの土砂降りの日、お前のアパートから帰る途中で、変なもんに出くわしたんだ」

「変なもん、って、どんなもんだよ」

「.....あれは、たぶん猫だと思う」

ザーザー降りの中を歩いてたら、雨音に混じって、ニイニイっていう猫みたいな鳴き声が聞こえてきてさ。見回してみたんだけど、猫なんてどこにもいないわけ。

「なんだ気のせいかな、って歩きはじめると、また聞こえてくるんだよ。ニイニイって」

捨て猫なのかな、ってそこらの物陰をのぞいたりもしたんだけど、見つからない。でもって帰ろうとすると、また鳴き声がするんだ。何だか薄気味悪くなって、すぐにその場を離れなきゃと思ったら――。

「いたんだよ、おれの足元に」

「いたって、猫が？」

「.....たぶん。でも、形はよくわからなかった。ザーザー降ってる雨が、ニイニイ鳴く半透明の何かに当たってるのが見えたんだ」

そいつがずるずると近づいてきたから、おれは目を離さないようにして、なるべく静かに後ろに下がった。そしたら、鳴き声がうなるようになってさ。やばいと思った瞬間、ガバッと飛びかかってきて。おれは差してた傘をこう、前に突き出して防ごうとしたら、何つうかスライムの詰まった水風船が割れたような感触がして――。

「おれは怖くなって、傘を放って逃げたんだ」

Aから新品の傘を受け取りながら、僕はその現場に足を運んでみたくなった。ニイニイと鳴くそいつは猫ではなく、必死に兄を捜し求める幼子であるような気がしたからだ。

僕の住んでいた町は、大規模な都市開発で造られた郊外の住宅地で、町の外れに大きく古い椎の木が立っていた。

椎の木は青暗とした葉を常に茂らせており、形の決まった団地ばかりの無機質な町並みの中でさながら特異点のようだった。

樹齢六百年の異様は、遠くからだ単にこんもりしているだけだが、近くに寄ってみると枝ごとにユニットを為しているのが分かった。小さなこんもりが寄せ集まって大きなこんもりを作っている様は、幼な心にフラクタルの存在を直感させた。

「しいのきにさわるとバチが当たる」

古老などいない新興住宅地で、子どもの中にそんな噂が広まった。

「どきょうだめししようぜ」

案の定、そんなことを言い出す奴がいた。

バチだのタタリだのは大人が子どもを叱るときの方便に決まってる、かわいげのかけらもなくそう思ったが、その前に流行った度胸試し「六号棟の庇から飛んで着地」をビビって棄権していた僕は、今回ばかりは挑戦しなければいけなかった。

悪友の視線を背中に受けながら椎の幹に近づいた。そばで見る幹は直伸しておらず、腕の太さくらいの幹が何条も絡み合っていた。

その猥雑さと黒く苔むした表面は、否応なく「バチ」を意識させたが、子ども社会での生存本能が現実味でそれに勝った。

実際に触れてみると、正直、拍子抜けした。ぬるりと湿った感触に怖ぞ気を震ったものの、実体があることに安心したのだと思う。

友達からの評価を挽回し、意気揚々と帰宅した僕に異変が起きたのは、夕食の席だった。

主菜に添えられたブロッコリーのこんもり感があの異様と重なった。目の前でブロッコリーを齧る母の姿が椎の木を喰らう巨人の姿に見えた瞬間、僕は卒倒してしまった。

それ以来、ブロッコリーは口にしていない。

カリフラワーすら見るのも厭である。

埼玉の片田舎に独りで暮らしていた祖父が亡くなり、その土地と家を私が預かることになった。築四十年の木造二階建てを改築し、妻と幼い息子とともにそこに移り住んだのは三年前のことだ。

息子の小学校入学を機に、妻がガーデニングに凝りだした。そちらには疎い私も、息子と同じ年頃の時分に親しんだ庭に色とりどりの草花が広がるのは心地よいものだった。

しかし、庭の片隅に佇むあすなろの横に生ゴミ処理のコンポストを設置したいと言われたときには、思わず声を荒げて反対をした。

そのあすなろは祖父がシベリア抑留から戻ってきた際に植えたもので、亡くなった身寄りのない戦友の亡骸の一部と一緒に埋めたと聞かされたことがあったからだ。

私の心配を、妻は一笑に付した。いいじゃない、あの木をどうこうするんじゃないんだから。結局、コンポストは設置された。

事実、妻の言った通り何事も起こらず、それどころか生命力を増したあすなろの姿を目にし、私は胸をなで下ろした。

しばらく経ったある日、コンポストの土の粘度の高さに気づいた私は、息子と一緒に泥遊びをすることにした。ぐちゃぐちゃとこねるばかりの息子に形の整え方を教えてやると、何事かを閃いたように土の面を作り出した。どれだけ声をかけても反応せず、おやつも忘れて没頭した息子は、数時間かけて驚くほど精巧な土の顔を完成させた。

そのはっきりとした目鼻立ちは明らかに息子の友達などではなく、見覚えのない大人の男の顔だった。誰の顔かと尋ねると、息子は憑き物が落ちたような様子で首をかしげた。

不気味に思ったものの、よくよく眺めるとその顔は心なしか微笑んでいるようにも見えたので、私はあすなろの根元を掘り、土面を丁寧に埋めてから、息子と二人で静かに手を合わせた。

りぼる婆

あれは、有名な動画投稿サイトが影も形もない四年前だった。

三十路を目前にして鬱に罹り、勤めていた会社を辞めた私は、カウンセラーの勧めで地元の小学校で毎週末にやっている子ども相手のパソコン教室の講師をやる事になった。

講師を始めて一年ほど経った頃の話だ。

提示した課題を終わらせた五年生三人が、アクセス制限に引っかかりにくいフラッシュ倉庫を覗いていた。どうやら中・高生の兄やその友達からアクセスの仕方を教わるらしい。

こちらの隙を見てゲームをするのはいつもの事だったが、その日の彼らは様子が違った。

三人とも興奮しており、こちらの視線を窺う素振りもなく画面を凝視していた。名指しで注意したが、静まるどころか逆に大声で騒ぎ出したので、慌てて強制終了の操作をした。

教室が終わった後、憑き物が落ちたような顔をした三人から話を聞くと、やっていたのは道行く老婆を拳銃で撃ち殺す「りぼる婆」というゲームだった。小学生がやるにはあまりに非倫理的な内容だったため、私は三人をいつになく強い語調で叱りつけて帰した。

その晩、私は自室のパソコンで件のフラッシュ倉庫を開き、「りぼる婆」のリンクにカーソルを合わせた。

ゲーム枠の下段がレンコンのような回転式弾倉の半径、上段に老婆が右往左往している。

銃身は固定されていて、老婆が中心に来た時に右下にある引鉄のマークをクリックすると弾が発射され、老婆が赤黒い色に染まる。

ゲーム性や表現は稚拙だったが、ただ一点、弾が発射される時の手応えだけは異常だった。

実際には感じ得ないはずの発射の衝撃と着弾の感触、そして命が消える喪失感が同時に脳髄を駆け巡り、痺れさせるのだ。

サイトから削除されるまでの五日間、私は寝食を忘れて老婆を撃ちまくった。

その月に市内で死んだ老婆の数が例年の八倍に跳ね上ったのは、嘘のような本当の話だ。

はかな、はかな。

雨降る朝の大通りを、あたしは歩く。

亡くなった娘の思い出と、失くしたはずの右腕の幻痛を抱えて。

はかな、はかな。

一年前の同じ雨の朝、同じ場所で、あたしと娘は居眠り運転のトラックに轢かれた。

こちらに向かって来るトラックに気づいた瞬間、とっさに右手を伸ばして娘を庇った。

直後に熱い衝撃が体を走り、視界が暗転。

意識が戻った時には、娘と右腕がこの世から永遠に失われていた。

「どうしてお前だけ生きてるんだ」

日頃は温和な夫が口にした言葉。

何も答えられなかった。

あたしは娘を守ろうとした。

その証拠に、失った右腕が発する幻痛には娘の最期の感触が残っている。

雨に冷えた柔らかい肌が、驚きと恐怖で強張っている。

余りにも生々しいその感触。

でもしかし、それはあたしにしか感じられないものだった。

「おまえがあんな名前を付けたからだ」

離婚した時に、夫に叩きつけられた言葉。

はかな、はかな。

雨降る朝の大通りで、亡くなった娘が失くした右腕を引く。

どこへ行くの？

雨煙の先から白いトラックがやって来る。

ああ。あたしも連れて行ってくれるのね。

突然、トラックが進路を変えた。その先を見ると、反対側の歩道を歩く若い母子の姿。

激しい既視感。

右手を引く力が強まる。

わかったわ、はかな。

右腕で娘を強く抱き締めると、あたしは、あたし達を助けるために駆け出した。

人魚の喉

よくよく考えてみたら、自分は何もない空っぽの存在だと気づいた彼は、放心状態のまま、行く宛もなく歩き出したようだ。

いつの間にか、名も知れぬ浜に辿り着いた。

夕暮れ時、砂浜に刻まれた足跡を白く濁った波が掻き消す。不意に疲労と倦怠に襲われた彼は、近くの岩場に腰を下ろした。

寄せては返す波音に漫然と鼓膜を揺らしていると、不思議な音色が届いてきた。

耳を澄ました瞬間に陶醉した。

フルートの軽妙さとマリンバの豊かな広がりを合わせ持ち、ときにベルリラのようにキラキラと散らばり、ときに白磁のカリヨンの織り成すが如く魂を包み込むように、音色が移ろい、千変万化する。

引き寄せられる様に音の源に足を向けると、浅瀬の白い岩に腰掛ける人魚の背が見えた。

人魚は彼を見返ると、歌いながら微笑みかけてきた。

亜麻色の長い髪の間から覗く鰓。その下の艶やかな首筋が発声で微かに震えている。

無性にあれが欲しくなった彼は、隙を見て人魚に飛び掛かった。

ぞぶり、喉元に喰らいつく。

音の変化が止まった。

まだ気管支だ。もっと深く。

ぞぶり、ぞぶぞぶ。

……これだ！

「——それで、手に入れた人魚の声帯を自分に移植して、その歌声を披露しようと俺を呼び出したのか」

俺がそう言うと、コクコクと彼は頷いた。

「仕方ないな。分かったよ、聴かせてくれ」

彼は真面目な顔で口を開くと、洞窟を吹き抜ける風のような音を響かせた。低い音と高い音を同時に出すこの発声法は、まさか——。

「ホ、ホーミーじゃん！ それも超うめえ！」

かくして彼は空っぽから一転、ホーミー奏者となり、成功を収めることになった。

クシロの目

教室でつぐみと早紀恵と喋っていたら、後ろから肩をぽんと叩かれた。振り向くと、日焼けした男子がはにかんだ笑顔で立っていた。

「おっす、クシロ」

「おっす」

と、私は愛想良くオウム返しをした。サッカー部の皆口だった。端正な顔立ちをしている彼は、サッカーもなかなか上手らしく、女子の評価はけっこう高いらしい。

皆口は何か話したような表情をしたが、言葉が見つからなかったようで、はにかんだ顔に寂しさを漂わせながら教室を出て行った。気にせず三人の会話を再開しようとしたところ、後ろから頭の上にぽんと手を乗つけられた。振り向くと、長身で短髪の男子が爽やかな笑顔で立っていた

。

「今日もちっちゃいな、クシロ」

「そっちは今日もデカイね、ムダに」

と、私はにっこり減らず口を返した。

バスケ部の三田村だった。三十人の部員を束ねる名主将で、なおかつ学業も学年トップテンの常連。むろんモテないワケがない。

「こないだ貸したCD、どうだった？」

「イマイチ。あたしラブソング苦手なんだ」

三田村は明らかに残念そうな顔をして、とぼとぼと教室を出て行った。

つぐみと早紀恵との会話を再開しようとする、二人の様子が何だかおかしい。

「皆口ってば、クシロが好きなのかも」

軽い口調でつぐみが言う。左目がトンボの様な複眼に変わっていた。

「三田村くんだって、クシロにラブソングだなんて。馬の耳に念仏だよね」

早紀恵は口唇の右端が耳まで裂けている。

お、こりゃまずい。つぐみは皆口が、早紀恵は三田村のことが、それぞれ好きなのだ。明日から、皆口と三田村とは距離を置こう。男子に好かれるのはイヤじゃないけど、女子に嫌われるのは現実的な死活問題だもの。

神様、私にこの目をくれてサンクス！

祖父の左目

祖父の左目の眼帯は、柔和な風貌とあまりに不釣り合いで、幼い私の興味を駆り立てた。

左目について幾度か尋ねた事があるが、いつもはぐらかされ、決まって大東流の武田惣角の孫弟子だったという自慢話を聞かされた。

しかし、半年ほど前、縁側で囲碁の一人打ちをしている所に茶菓子を持っていくと、祖父はおもむろに口を開き、左目にまつわる奇妙な話を語り始めた。

あれは、戦後すぐの話だ。

中国から帰還してしばらく経ったにも関わらず、戦場で湧いた感情の昂ぶりや血のたぎりがいつまでも収まらなかった。堅気仕事に就く気にもなれず、用心棒の真似事をしながら暴力にまみれた日々を送っていた。

ある日、腕っぷしの強さを聞きつけた役人が外交官の護衛兼通訳として台湾に行く仕事を依頼してきた。そこらの盛り場は荒らし尽くしており、歯向かってくる相手もいなくなっていたので、是非もなく引き受けた。

台湾に着いたその夜、歓待の宴席で中国人の男が声を掛けてきた。温厚そうな佇まいだったが、こちらを透徹する視線は自分と同じ武術家のそれだと一目で分かった。

「あなた、厄介なものを宿していますね」

流れるような動作で男は手を伸ばし、呆然と立つこちらの左目に指を滑り込ませた。きゅぽん、酒栓を抜くような音が響き、視界が半減する。残った右目が、男の掌で転がる左目を見つけた。空になったはずの左の眼窩から暗褐色の液体が零れ出す。男が口をすぼめると、零れた液体はその中に吸い込まれていった。男の腹が見る間に膨れる――。

左目は失ったものの、その夜以来、気持ちの昂ぶりは嘘のように収まった。

「あの男はたぶん、八極拳の劉雲樵だな」

そう言いながら少しだけ見せてくれた祖父の左眼窩は、底が見えないくらい暗かった。

雪迎え

中学に入った年の初冬の話だ。

父の思いつきで、父子二人でスキーをしに山形まで行ったのだが、師走の雪国だというのに雪が全く降っておらず、落葉して色褪せた山野が広がるばかりだった。

宿泊先は山の麓の小さな温泉宿で、接客は腰の曲がった老婆が一人でこなしていた。

父が雪について尋ねると、老婆は皺だらけの口をもごもごと動かして返答した。

方言まじりで聞き取りづらかったが、

「今年は『ゆきむかえ』が飛ぶのが遅い」

と言っているらしかった。

ゆきむかえとは、おそらく「雪迎え」なのだろうと想像できたが、それが飛ぶとはどういうことか。さっぱり理解できなかった。

スキーができたかは、言うまでもない。

夕食が済み、うまいまいと地酒を呷ってさっさと寝てしまった父を置いて、私は一人で離れにあるという温泉に入ることにした。

離れへと続く石畳を歩いていると、庭の方からガサガサと枝葉を揺らす音が聞こえた。

風など吹いてはおらず、ムササビか何かがいるのかと夜目を凝らすと、庭向こうの巨木のとっぺんに佇む人影を見つけた。

女の後ろ姿だった。白くおぼろげな輪郭は幽霊のようだったが、月光を弾く黒髪があまりに美しく、私は息を呑んで女を見つめた。

近づこうと一歩踏み出したその瞬間、黒髪がうねり、女は夜空に跳躍した。

月光に融けたか、夜気に混じったか、その姿はあっという間に掻き消えてしまった。

生まれたばかりの思慕を拒絶されたかのように思え、私は大声を上げた。

それから後の記憶は不確かで、いつ床に就いたかも覚えていない。

明くる朝、あまりの冷え込みに目をさますと、窓から覗く風景が白く輝いていた。

「ゆきむかえが飛ぶのを見た」

そう伝えると、朝餉の支度をする老婆の顔がくちゃくちゃになった。